

Title	<書評>合場敬子著 『女子プロレスラーの身体とジェンダー --規範的「女らしさ」を超えて』 明石書店、2013年、2,800円 + 税、232頁
Author(s)	萩原, 卓也
Citation	コンタクト・ゾーン = Contact zone (2015), 7: 287-294
Issue Date	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/209794
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Contact Zone 2014 書評

合場敬子著

『女子プロレスラーの身体とジェンダー——規範的「女らしさ」を超えて』

明石書店、2013年、2,800円＋税、232頁

萩原卓也

本書は、現代日本社会におけるジェンダー規範から女性たちを解放する潜在力を、女子プロレスラーの身体に問うた書である。著者は、2004年春から2005年秋までのあいだに日本の女子プロレスラー25人に対して行った詳細なインタビューをおもな分析の拠り所とする。そこに2002年から2005年にかけて足を運んだ女子プロレス興行の観察、プロレス雑誌や女子プロレスラーの自伝などの資料の分析を加えた産物が本書である。以下、特に断りのない場合、レスラーは女子プロレスラーを指す。

著者は、現代日本社会においてジェンダーによって構築された男女の規範的な身体の在り方を問題に設定する。女性は理想の女性の身体を作り上げることが促進される一方で、自らの身体的な力や運動能力を伸ばすことは奨励されていない。これを本書は、ある社会にとって求められる身体を形成していく過程がジェンダー化されている、つまり「ジェンダー化された身体の社会化」(9頁：以下、本書からの引用は数字のみ記す)と捉えている。そこで本書は、規範から逸脱していると見受けられる女子プロレスラーの身体に対する認識や身体をとおして彼女たちが獲得した能力や恩恵を明らかにすることで、規範的な女らしさに悩まされる女性をジェンダー規範から自由にする可能性を問う。身体をとおしたエンパワーメントの可能性を女子プロレスに見出そうという試みである。これが各章を貫く目的である。各章において、著者は英語圏の豊富な文献を概説し、各章の問題設定を丁寧に行う。そうして得られた分析枠組みを参照しながら、それらと著者の集めた詳細なインタビューのデータをさまざま角度からストレートに比較検討している。日本における本研究分野の進展が求められるなか、著者のこの試みは極めて重要である。

本書は、数少ない貴重な女子プロレスの学術書でもある。広範囲かつ詳細なインタビューを25人のレスラーに実施することの困難さは想像に難くない。著者が引き出した25人のレスラーからの卒直な回答の厚みは、読み応えがある。また、本書は、研究を始めるまでプロレスに縁のなかった著者が、レスラーとの深いコンタクトのなかで書き上げたものである。本書には、著者自身が女子プロレスに対して理解を深めていく過程も随所に刻まれている。以上の点は、プロレスについて語るときに嫌でもつきまとうであろうあ

287

る種の胡散臭さとは距離を置いた「魅力的」な世界としてプロレスを描き出すことに一役買っているといえよう。

以下に、本書の内容を章ごとに紹介していく。本書は全8章からなる。そのうち、第4章、第5章、第6章、第7章の4つの章は論文として既に雑誌に掲載されたものに著者が加筆修正を加えたものである。

- 第1章 女性の身体とジェンダー
- 第2章 女子プロレス興行の特徴と軌跡
- 第3章 プロレスラーになる夢——オーディション合格を目指して
- 第4章 プロレスができる身体への変容
- 第5章 闘う技能が生み出すもの——自己防衛への応用
- 第6章 演技としての女子プロレスとジェンダーの変容
- 第7章 力を獲得する身体と挑戦される身体
- 第8章 身体変容と身体フェミニズム

第1章「女性の身体とジェンダー」は理論編である。ジェンダーによって構築された規範的な身体からの解放を考察するうえで、女子プロレスに着目する意義を先行研究のなかで位置づけている。日本におけるフェミニズム研究においては、女性のこのようなジェンダー化された身体の社会化の問題は存在していたにもかかわらず、今日までさほど注目されてこなかったという。著者はこの問題を考察するために女子プロレスラーに着目した理由として、(1) レスラーは日本社会において多くの女性たちが要請されている身体の在り方とは異なった方向、すなわち筋肉と脂肪をつけ、より大きく身体を変容させていること、(2) レスラーになることで闘う技能という身体的な力を獲得していることをあげている。次に著者は、身体とジェンダー研究において豊富な蓄積がある英語圏の文献のなかでも、男女の身体の規範的な在り方を脅かす側面をもつことが示唆されている女性ボディービルダーの先行研究と自己防衛 (self-defense) のスキルを獲得する女性を対象にした研究群を取り上げ、女子プロレスラーと比較する。女子プロレスラーは、女性ボディービルダーのように規範的な女性としての身体の在り方とは異なる方向に自分の身体を変容させ、さらに自己防衛スキルを獲得した者のように闘う技能を身に付けている。つまり両者の特徴を兼ね備える彼女たちも、規範的な身体の在り方を変容させる潜在力をもつと著者は位置づける。

第2章「女子プロレス興行の特徴と軌跡」は、女子プロレスの基本的な特徴を読者に理解してもらうための章である。プロレスの定義、興行・試合形式、レスラーの試合への意識、日本における女子プロレスの歴史、アメリカとメキシコにおける女子プロレスとの違いを説明している。まずプロレスの定義であるが、プロレスを芸能という観点から定義した亀井好恵の視点〔亀井2000〕を発展しつつ、著者はプロレスを「舞踏・演劇的形態の表現も使いつつ、競戯・曲戯的形態の表現が中心となった鑑賞性・営利性・娯楽性を追求する舞台芸能」(23) と定義する。次に、著者の調査時における女子プロレス興行の様

子、試合形式を実際の試合展開を例に記述している。そして、女子プロレスラー本人たちの闘いに対する意識をインタビューから明らかにしている。プロレスは喧嘩ではなく、「技を掛ける方は相手に怪我をさせないこと、技を受ける方は怪我せずに技を受けられるという相互の信頼」(40)に基づく闘いであること、レスラーは観客を楽しませることを一番の目的としてプロレスをしていることが示される。つづいて、男性に対する性的見世物として捉えられていた女子プロレスが、ビューティ・ペア、クラッシュ・ギャルズ、団体対抗戦という三大興隆期を経て、現在の低迷期につながるという歴史的な流れが記される。

第3章「プロレスラーになる夢——オーディション合格を目指して」では、レスラーを志した動機と、団体のオーディションに合格するまでの努力と困難が分析される。10代の少女たちが伝統的には男性に奨励されてきた特徴をもつレスラーを志した契機は、テレビ中継、地方巡業、プロレス好きの家族の影響であった。ほとんどのレスラーは入団する前に好んでスポーツを経験しており、さらに身体的な能力には自信をもっていたと語っている。一方で、体を動かすことが苦手な人でもレスラーになっているケースが見受けられた。彼女たちはおもに3つの要素に魅惑されてレスラーを志していた。それは、(1) 体格がよいことを良しとする、女子プロレス界の多様な身体の肯定、(2) 強さの表現、曲芸的な動き、コミカルから卑劣な行動までを含む多種多様な身体演技、(3) 自分の身体ひとつを使って稼ぐ職業、の3つである。さらに、芸能活動を行う人気のレスラーや、衣装などを含む女子プロレスの華やかさに惹かれる人もいた。しかし、レスラーになりたいと決心しても、多くの親はその娘の考えに反対していた。

著者は、インタビューした25人のレスラーを、人気があった時期にデビューしたレスラーと、人気落ち込んだ時期にデビューしたレスラーの2つのグループに分け、彼女たちのオーディションに向けての準備具合を比較している。そこから、低迷期には応募者数も少なくなり有望な練習生候補をオーディションの時点で選別することが困難になったため、やる気のある者を合格させ育てていく方針に転換した可能性を浮かび上がらせている。

第4章「プロレスができる身体への変容」では、レスラーの身体そのものの変化に着目する。現代日本社会に生きる多くの女性たちにとって支配的な価値であるスリムな身体から逸脱している女子プロレスラーを分析の対象にすることによって、女性たちがその支配的な価値観から解放される契機を見出すこと、これが本章の目的である。そこで著者は、プロレス団体に入団したレスラーがプロテストに合格するまでに自分の身体に起きた変容に対して抱いた認識と、プロレスができる身体へと訓練されるなかで彼女たちが獲得した身体に対する考え方に注目する。

著者が割り出したレスラーの肥満指数も示すように、レスラーの体格は同年代の日本女性全体の平均に比べて大きい。しかし、職業的に身体が大きいことが良しとされ、スリムであることが強く要請されない女子プロレスの世界でさえも、多くのレスラーは女性らしいスリムな身体に縛られていた。一方、レスラーとしての身体に自信をもちつつ、規範的な女らしい身体に挑戦していると認識しているレスラーもいた。なかでも、強くてカッコいい身体も女性として魅力的であるというように、「魅力的」な女性の身体像を自分で再

定義し、レスラーとしても女性としても魅力ある身体を新たに作り出していたレスラーに著者は注目する。このレスラーの姿勢は、規範的な女性としての身体の在り方に挑戦する言説のひとつになりうるが、問題はその影響力の及ぶ範囲が女子プロレス界のまわりに限定されていることだと著者は指摘する。総じて、先行研究における女性のボディービルダーよりも、女子プロレスラーの方が自分の身体に対して多様な考えをもっていた。これはボディービルディングの世界と異なり、女子プロレスの世界においては目標とする理想の身体が必ずしもひとつではなく、自分の身体的特徴も他者と差異化するうえで重要な個性になりうるという女子プロレスの価値観に下支えされているためであるという見解を著者は示す。

第5章「闘う技能が生み出すもの——自己防衛への応用」では、レスラーの闘う能力の側面に注目している。ここでは、学校体育、メディアにおける女性身体の表象、近代スポーツにおける女性身体からの攻撃性の排除などによって女性に要求される規範的な女らしさとしての「身体的脆弱性」(108)に問題を設定する。著者によれば、身体的脆弱性とは、「女性が社会化される過程で自らの身体的力を脆弱だと感じ、また男性に比べて身体的に脆弱だと感じること」(108)である。ここで具体的に想定されている身体的脆弱性に対する暴力とは、男性から女性に対して振るわれる暴力や性暴力、夜道や電車内での痴漢行為である。自己防衛訓練に参加する女性を扱った研究群は、このような暴力に対抗できるようになる能力の獲得の可能性を考察している。それを参照しつつ、プロレスという闘争的スポーツを実践する女子プロレスラーが、鍛えた身体と習得したプロレス技をいかに日常生活で遭う暴力に対して応用しているのかを検証している。

著者の想定とは異なり、そもそも入団前から自分の身体に自信をもっていた、すなわち身体的脆弱性をもっていなかったレスラーが多く存在することが明らかになった。これは、入団前に経験した身体活動や体育をとおしてもたらされていると著者は推測する。また、闘うための身体的な力を獲得していても男性からの暴力を恐れる人がいること、またその逆のケースもあることがインタビューから浮かび上がった。プロとして素人に手は出せないと語る人や、外見から男であると判断されるようになったため誰も襲ってこないと考えているレスラーもいた。また、男子レスラーと対戦した経験をもつレスラーは、打撃系の技では敵わないものの身体の柔らかさでは負けないのでうまくやれば勝てると、男性の力を実感したことによって男性と女性それぞれの身体の優位性を理解し、結果として自信をつけていた。厳密に検証できなかつたと著者は断りを入れながらも、闘争的スポーツやそれに類似した身体活動をすることは、さまざまな形で身体的かつ精神的な力と自信をレスラーに与えていたため、男性からの暴力に対抗できるという自信を育てていく潜在力をもつと指摘し第5章を閉じている。

第6章「演技としての女子プロレスとジェンダーの変容」では、プロレスの演技の側面に注目する。プロレスでは、身体を鍛えて強くなる以外に、自分の個性を表現し、観客を楽しませることが重要になる。そのために、レスラーは、悪玉としてのキャラクター、楽しさを追求する独自のスタイル、女性としてのエロティックな魅力、痛さの表情や声を伝える観客との相互行為、身体の装飾などをとおして個を確立しようと奮闘する。これら

は、ジェンダーによって構築されている規範的な身体とどのような関係になっているのか。

試合におけるセクシーさの演出や善玉のかわいい振る舞い、女らしい身体装飾の工夫などは、異性愛のジェンダー秩序を再生産していた。しかし、それらは現代日本において支配的なそれとは異なり、観客に受けさえすれば肯定されるプロレス界においては数ある価値要素のうちのひとつにすぎないという点で、異性愛のジェンダー秩序を変容させていた。さらにいうと、プロレス界の価値体系自体が、異性愛のジェンダー秩序を変容させていた。コスチュームと身体の関係では、理想の女性身体と理想の男性身体の要素が併存している側面が見受けられ、それは異性愛のジェンダー秩序を変容させていた。すなわち、「セックス・カテゴリー、ジェンダー・カテゴリー、性的指向のイデオロギー的結びつき」(137)であるセックス・ジェンダー体系の二元的構造そのものを揺るがしていた。さらに、女子プロレスで展開されている攻撃性を示す身体の動きや強さを示すレスラーの身体そのものが、女性としての規範的な身体の在り方を変質させていた。強力な個性が多様に存在するこのような女子プロレス界に、「複雑な混合物」(172)という言葉をあて、著者は第6章を締める。

第7章「力を獲得する身体と挑戦される身体」では、レスラーがプロレスをしていることで日常生活のなかで受けている恩恵と挑戦を明らかにする。そこから、日本社会に生きる女性が、男性がそうするほど奨励されていない身体活動への参加をとおして得られるはずの恩恵について検討することを目的とする。それは、「身体的エンパワーメント」(177)、つまり「本来持っている身体的力を十分に発揮できない現代日本社会の女性が身体的力をつける過程」(177)を考えることである。

レスラーが受けた恩恵は、上下関係の厳しい世界で培われた礼儀正しさや人を思いやる気持ち、重い物をもてるようになった身体的な強さや、我慢強さといった精神的な強さ、自信の獲得である。彼女たちが受けたジェンダーによる規範からの挑戦としては、身体の変化により物理的に（規範的な女らしさを表す）かわいい服が身体に入らなくなったことがあげられる。しかし、それを大きな問題だと考えるレスラーは少なく、ジャージや男物の服を代わりに着ていた。つまり、ジェンダー規範からの挑戦に対抗しているわけではなかった。また、レスラーの中にはその短髪、楽な格好、大きな身体のせいで女装した男性だと勘違いされたり、女性専用車両や女子トイレを使用する際に男性とみなされ不快な思いを経験している人がいた。これは、男らしさを示すレスラーに対する挑戦である。しかし同時に、意識的ではないが、結果として、セックス・カテゴリーが女であるならばジェンダー・カテゴリーも女であることを示すような糸口を周囲に提示しなければならない、というセックス・ジェンダー体系に抵抗していると著者は指摘する。これは、「ジェンダーによる規範に適合的に見える男女でも、本章の女子プロレスラーのように、ジェンダーによる規範を脅かす行動を取っている可能性がある」(198)という点で、ジェンダー研究に新たな観点をもたらすものだという。入団前からの身体活動の経験につづき、レスラーは入団後もプロレスをとおして身体的エンパワーメントを経験していた。すなわち、現時点で身体活動をしていない女性たちも、身体活動への参加によってエンパワーメント

を経験することができる可能性を示唆していると著者は述べる。

第8章「身体変容と身体フェミニズム」は、本書のまとめである。女子プロレスラーが一般女性に与える影響力と、著者のいう「身体フェミニズム」(204-205)の思想と実践が考察される。身体的かつ精神的強さを獲得していた多くの女子プロレスラーの認識や経験は、異性愛のジェンダー秩序に親和的な側面を持ち合わせつつも、規範的な女らしさに対抗する潜在力を有していた。その理由を著者は、「一人ひとりが持っている身体的特徴が評価され、価値を持っているとするこの女子プロレス界の価値感」(201)に求めている。次に著者は「身体フェミニズム」を提唱してきた先行研究を参照しながら以下のように再定義する。身体活動に参加することで得られる恩恵による身体的エンパワーメントと、それをフェミニズム思想と関連付けて理解する精神的エンパワーメント、この両側面を併せもったものが「身体フェミニズム」(205)である、と。最後に、身体フェミニズムの目指すところを2点あげている。ひとつは、女性の身体活動への参加を奨励すること、またそれによる恩恵もしくは参加しないことによる弊害を明らかにすること。もうひとつは、女性が自己防衛訓練などを含む身体活動に実際に参加することをとおして、男性からの暴力にも対抗可能なように身体を変容させ、身体的な力・自信・恩恵を実感することである。

以上が本書の概要である。評者の力量不足で全体像を描写できたか心許ないが、これより以下では、本書に対する評価を述べたい。著者がさまざまな角度から丁寧に比較検討することで導き出した本書の核は、女子プロレスラーが見せた既存のジェンダー規範を揺るがす潜在力と、彼女たちの身体性と認識の多様な在り方とその共存である。女子プロレスラーが自信を獲得しているのも、規範的な女らしさから逸脱しつつもそれを大したことは受け止めない態度も、女らしさを自分のなかで再定義する力も、この多様な在り方を肯定する価値観が根底にあるようであった。しかし著者は、「複雑な混合物」(172)と指摘するその多様な在り方について、あまり踏み入って考察してはいない。それは、本書の目的が、身体的な規範から逃れられない女性に対しての可能性を問うている、つまり分析結果の還元の対象が個人個人であるために、研究の手法も個人的な経験に注目する形をとっているためと推測される。事実、著者自身も172頁の注釈において「個人の身体の枠組みを堅持する」と書いている。

さらに、先行研究が指摘する精神と身体二分法の克服や、自身の身体の外存在と一体化する感覚の獲得といった類の身体の再定義について、著者はその重要性を認めつつも、それら「本来持っている力を十分に発揮できない人々が「力を付ける」過程として定義されているエンパワーメントとしては把握できない」(178)として、考察の対象から外している。しかし、著者も身体フェミニズムを個人の水準ではなく集団の水準で実践される重要性を主張しているように(204)、個々の認識に迫るだけでなく、やはりその多様な個性の共存を可能にしている集団の在り方についても考察を加える必要があるだろう。そうすることで、著者の分析もよりいきてくる。以下に、個人とエンパワーメントの関係における集団の在り方を、この論集のキーワードでもあるコンタクト・ゾーンにならって、(1)選手どうしのコンタクト、(2)技を受けるというコンタクトの特性、(3)近代ス

ポーズとのコンタクトの3点から考えてみたい。

レスラーがもつに至った認識や経験は、ある集団内における相互行為の積み重ねのなかで獲得してきたものであろう。しかし、多様な在り方が肯定されるこの集団が形成される場、つまり練習ないしリングの外における選手どうしのコミュニケーションを実際に観察することは難しい。しかし、たとえば、40頁や185頁において、著者はレスラーどうしの会話の場面を語るレスラーの言葉を取り上げている。このような選手どうしのやりとりを、著者の目で観察するために、フォーカスグループ・インタビューのような形式で話を聞く方法があるかもしれない。本書にも、前受け身の反復によってできる肘の擦り剥けた痕の話や笑いながら語るレスラー(80)、基礎体力トレーニングの思い出として首が太くなりアクセサリが着けられなくなった話(86)、新人のときの辛すぎる練習生活の話、などがでてきた(90-91)。これらの成長物語がいかにかに語られ、共有され(もしくは共有されない)、おたがいの身体の違いをどのように評価しあうのか。この点で、本書には収められていないが、著者が女子プロレスラーの痛みや怪我の経験について考察を加えた論文[合場2010]も、レスラーどうしの相互行為によって生じた怪我や痛みが女子プロレスラーという集団をいかに形成しているのか、という側面から捉え直すと大変興味深い。以上のように、個人的な経験から少し視点をずらして、集団それ自体を形成する選手どうしのやりとり、身体を基盤としたやりとり、さらには個人の身体を超えた他者の身体との関係に注目することで、強烈な個が共存する集団の在り方、レスラー個人の認識や経験を根元で支えている関係性に肉薄できるかもしれない。

次に、技を受ける、というプロレスに特有のコンタクトの仕方から、彼女たちの関係性の構築の仕方について考えてみたい。女子プロレスラーになることは、(今までとは異なる身体の使用法という意味で)自分自身との、さらには一緒に練習を行う人や試合で闘う人との、身体を生活の中心においた関係の結び直しであろう。そのなかで一番特徴的なのが、技を受けることを前提として試合が成り立つプロレスをしている、という点ではないか。これを彼女たちは信頼関係と言い表している(40)。著者がインタビューをしたレスラーのなかに、男性のレスラーから技を受けたとき、相手の男性のみならず自身の身体に対する解釈を更新したレスラーがいた(133)。それは、相手の長所と短所を知るとともに自分の身体の長所と短所をも知るといふ、自身の身体の再定義につながっていた。受ける能力を発達させることによって、他者に対して身体が開かれていく。そして、その開かれた身体を介して、相手のみならず自分のことも理解する力を培っていった、という見方もできるのではないだろうか。これは、著者がその重要性を認めつつも本書での考察を省いた、自分の身体の外存在との関係における身体の再定義(178)に近いものかもしれない。彼女たちにとって入団前とは異なるこの特有な関係性の結び方は、彼女たちの身体的エンパワメントを根っこで支えているひとつの要因なのではないか、というのが評者の率直な所感である。しかし、そうやってしまうと、受動性と女性性の相関を示す伝統的なジェンダー規範の構図に回収されてしまう恐れもある(11、14)。それについては、以下にあわせて検討したい。

最後に、身体活動に対する著者の姿勢について一言指摘して終わりにしたい。「身体的

エンパワーメント」という用語に評者は少し違和感を覚えてしまった。確かに著者の主張するように、スポーツを含むさまざまな身体活動に参加したいとする女性を阻害するような社会構造が存在してはいけないし、身体活動に参加することで得られる恩恵は山ほどあろう。しかし、忘れてはいけないと思うのは、女子プロレスラーがみせた多様な在り方の共存という世界におけるエンパワーメントも、練習やしごきに一定期間耐えるという修業を乗り越えられた「勝者」だけに与えられているということである。彼女たちの多様性が担保される世界の裏には、オーディションで落選した人、練習に耐えきれなくて、もしくはいわゆる体育会系の厳しい縦社会に馴染めなくて辞めざるをえなかった人が数多く存在すると思われる。誰でもなれないからこそその女子「プロ」レスラーなのであろう。何もこのような闘争的スポーツばかりが身体活動ではないが、闘争的・競争的でない身体活動の多くも、個人能力還元主義とも競争主義とも強い関連性をもつグローバルに制度化された近代スポーツという支配的な現象に覆われてしまっていることに留意する必要があるだろう。上記の女子プロレスの世界も、男性性の構築の基盤となるホモソーシャルな関係（113）を強化するともいえはしないか。しかし、著者が明らかにした女子プロレス界の多様な個が混在する世界、また上記で指摘した選手どうしのやりとりや、技を受けることで成り立つ身体的な関係性を考慮すると、それは身体的規範として女性に課せられてきた受動性とも、先行研究で指摘されてきたホモソーシャルな関係とも、質が異なるのではないかと推察される。この点を掘り下げるためには、男子プロレスにおいて類似の研究を実施し比較する必要があるかもしれない。

<参考文献>

- 合場敬子 2010 「女子プロレスラーの怪我と痛み」『スポーツとジェンダー研究』8: 18-34。
亀井好恵 2000 『女子プロレス民俗誌——物語のはじまり』雄山閣出版。